

高等教育研究センター

かわらばん

冬号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第13号

教育と大学について

「青臭い」議論をしてみよう

ニューズレターを『かわらばん』にリニューアルして、今回が第二号になります。だいたい、部局のニューズレターというものは、部長のよそ行きのご挨拶が巻頭に載って、あとは「こんな一生懸命にやっています」という自慢話が続くというのが相場です。紙の無駄ですね。『かわらばん』には、われわれの大学をどうしようか、いやそもそも教育って何だ、大学って何のためにあるんだ、と呻吟するわれわれ大学人の「うめき声」のようなものを載せていきたいと考えています。悩みの吐露があり、挑発があり、それに触発された反論や提案があり、といった多様な肉声が響きあうメディアに育っていったら幸いです。

次世代に何を伝えたらよいのか

というわけで、今回は思いっきり大風呂敷を広げつつ個人的な想いを書いてみたいと思います。気を悪くされる方もあるかもしれませんが、どうぞ反論してください。紙面は名古屋大学構成員のみなさんのものですから、話題は、大学があることの人類学的な意味、といったことです。社会にとつての意味ではありません。人類にとつての意味です。理化学研究所のプレスリリース

(二〇〇二年一月四日)によると、ヒトとチンパンジーのゲノムの違いは1.23%(約三千万塩基)しかないそうです。思いの外、近い存在です。しかし、一方でヒトとチンパンジーはだいぶ違います。チンパンジーは理化学研究所や大学をもつていませんし、それらを独法化したりもしません。違いは次の点です。ヒトはチンパンジーやその他の種と違って、世代から世代へと情報を伝達する装置として、生殖と遺伝以外のチャンネル、つまり文化と教育をつくりあげ、しかもそのチャンネルに生存を大きく依存するようになっている種だということです。もちろん、幸島のニホンサルにみられる芋洗いやサドルバックという鳥のさえずりのように、ヒト以外の種にも文化の世代伝播という現象は見られるようですが、ヒトの場合はその程度がはなはだしい、という違いがあります。



だとして、良い遺伝子を残すこと以上に、次世代に良い文化的アイテム(概念・アイデア・思想・制度・学問・芸術・科学)を残すことは、次世代のヒトの生存にとって重要な課題だということになります。後者を過小評価したのが「優生学」と呼ばれる運動でした。われわれの生存は、もちろん科学技術の成果に支えられています。それと同様に思想や概念によつても支えられています。たとえば、「人権」と

人類史的観点から見た場合、大学はこうした世代間情報伝達装置の主要な構成要素です。その本来の目的は、人類の知的遺産の継承と伝達を助けて他にはありません。昨年、『ザ・デイ・アフター・トゥモロー』という映画がヒットしました。人類を突如として氷河期が訪れるという荒唐無稽な映画ですが、その中に忘れられないシーンがあります。想像を絶する寒波に見舞われて身動きとれなくなった主人公たちは、図書館(NY Public Library)に閉じこめられます。ものすごい寒さ。とうとう彼らは本を燃やして暖をとることにします。そのとき、ある男が一冊の本を抱えて「この本だけは燃やさない」と抵抗するのでした。その本は、『グーテンベルグ聖書』つまり人類最初の活字印刷による書物です。彼は言います。「人類が再び文明を再建するときまで、この本がどんなに世界の広がりをもたらしたかを伝えなければならぬ」。

このシーンを見ていて思い出したのが、フランソワ・トリュフォー監督の『華氏451』(一九六六年)です。愚民化政策の一環として、本を読むことも所有することも禁じられた世界に、book peopleと呼ばれる人々のコミュニティがあります。彼らは、人類の知的遺産たる思想・文学を継承するために、それぞれ一人一人が一冊の本を暗記して、文字通り「本の人」として生きていくことを決意した人々です。「この人は、マキャベリの『君主論』だよ」と紹介された相手は、あまりにみすぼらしく風采が上がらない姿なのでじろじろ見ていると、「君、本をカバで判断しちゃダメだよ」と『君主論』が答える、というシーンが記憶に残っています。

大学の使命

教育機関としての大学のつとめが、人類の知的遺産のリレーに加

From the Data

理系よりも文系の方が学習時間は長い 女子よりも男子の方が個人差大きい

2004年に実施された名古屋大学の学生生活状況調査(標本数1,244)によると、一日の学習時間(授業時間を除く)が1時間未満と答えた学部生の割合は約半数(50.9%)でした。

これを文系・理系別にみると、文系は3時間以上学習する学生が比較的多いのに対して、理系は30分未満の学生が全体の約4分の1(24.9%)を占めています。男女別にみると、男子学生は学習時間の多い学生と少ない学生とに二極化する傾向が女子学生よりも大きいことがわかりました。つまり、学習時間の個人差が大きいようです。

授業時間数が多いはずの理系学生の方が文系学生よりも学習時間が短いのはなぜでしょうか。なぜ男子学生の学習時間は個人差が大きいのでしょうか。このデータはいろいろな問いを投げかけてくれます。(近田 政博)

学習時間	文系 (%)	理系 (%)
1時間未満	~55	~50
1時間~2時間	~25	~25
2時間~3時間	~15	~15
3時間以上	~5	~5
不明	~0	~0

学習時間	男子 (%)	女子 (%)
1時間未満	~55	~45
1時間~2時間	~25	~25
2時間~3時間	~15	~15
3時間以上	~5	~10
不明	~0	~0

わる人々を再生産すること以外に何かがあるのか、と私は思います。大学が育てる人物像は、「過去の知的遺産に対する畏敬の念を持ち、いまはわからなくともいつかは分かりたいというあこがれをもち、それを理解するための努力を惜しまず、その努力が同時に生きる喜びであり誇りでもある人」であるべきです。この原点に還るべきじゃないですか? アドミッション・ポリシーとやらで、齋藤孝じゃあるまいし、「〇〇力」をねつ造している場合じゃないぞ、と私は思います。どうです。青臭いでしょ、理想論

でしょ。でも、現在の大学の一番の問題点は、教員をはじめ学生を含むすべての構成員が、こうした理想論を直視することから一斉に遁走を始めているところにあるのだと私は確信しています。すでに、二〇〇三年の学生生活状況調査では、月に読む本が一冊以下の学生が60%を超えました。華氏451の世界は、「支配者」とやらの陰謀を待つまでもなくわれわれの足下から実現しつつあります。

(戸田山 和久)

アメリカの大学の教養教育カリキュラム

～四年間のナビゲーション～

アメリカにおける潮流

アメリカ合衆国の九月は、カレッジの多くの新入生にとって、四年間の教養教育を通して自分自身の将来像を模索する「サバイバル」の始期にあたります。

ひんぐち(アメリカの大学の教養教育 (Liberal Education) といつても、決まった型があるわけではありません。米国大学協会 (Association of American Colleges and Universities) ではひとまず教養教育を、「個人を力づけ、無知から精神を解放し、社会的責任を培う教育理念として位置づけています。こうした教育理念を具体的なカリキュラムに変換し実施する方法は個々の大学によって異なりますが、そこにはいくつかの傾向が認められます。例えば、近年のアメリカの大学における教養教育カリキュラムの潮流として、個々のコースやプログラムで取り扱う主題が古典的な問題からより現代的な問題へと移行してきていること、目標とされる学習成果が職業社会で通用するスキルの獲得を見すえた実学志向の強いものへと変化してきていること等が最近の研究で指摘されています。

大規模研究総合大学の教養教育カリッジ

それでは、名古屋大学がモデルとする大規模研究総合大学のカリッジではどのような教養教育カリキュラムが展開されているのでしょうか。ここでは、筆者が客員研究員として滞在(二〇〇五年七月～十月)したミシガン大学アーナーバー校の教養教育カリッジ (College of Literature, Science, and the Arts, 以下LS&A) を事例に、印象深く感じたところをこ

紹介しましょう。LS&Aのカリキュラムは、一・必修(初年次文章作成、上級文章作成、数量的推論、外国語、人種および民族性)、二・領域配分必修(自然科学、社会科学、人文、あわせて、自然科学、社会科学、人文、数学および記号解析、創造的表現、学際から三領域選択)、三・集中課程(主専攻)、四・選択、二の部分は知識、技能、態度といった三つの要素の組み合わせで構成されていることがわかります。これは、LS&Aで学ぶすべての学生が共通して体験し、修得すべき能力として考えられています。

教養教育における地図とコンパス

こうしたカリキュラムの全体構図が、いわば大学固有の教養教育理念を具体的に描いた地図のようなものであるなら、一義的には、それを実際に活用する主人公は教師ではなく学生であるはずですが、LS&Aは、カリキュラム全体構図のなかで調和する個々のコースやプログラムの設計し、学生を地図に沿って最終目的までナビゲートすることをミッションのひとつとして、さらに学内外の利害関係者に対する責務のひとつとして自覚しています。学生は教養教育カリキュラムを通して各自の学習デザインを描き最終目標に向かってまい進する自立した存在であること、その歩みを助けるコンパスのような役割を果たすのが大学のさまざまな支援制度(助言制度、個人指導、同僚支援)であることが、はつきりと可視化されている点は注目に値します。さらに、スポーツや文化、社会奉仕、芸術活動、国際体験などの諸活動(Co-curriculum)を重視し、正課のカリキュラムとの相補関係にも期待が寄せられています。こうした大学の

姿勢は、ミシガン大学の同僚機関においても認められます。

組織的な問いへ

LS&Aが学生に発信している示唆的なことばに、「情報にもとづいた意思決定者たれ(Be an informed decision maker)」というメッセージがあります。どのように適切な情報に基づいた意思決定者を育てるのか、この問いを大学や教師がたゆまず組織的に思考していくことは、教養教育カリキュラムを開発する方法論の洗練につながっていくことでしょう。(鳥居 朋子)



秋学期の初日ににぎわうミシガン大学のセントラルキャンパス。図書館前の広場に集う学生たちの背後に、ハリケーン「カトリーナ」の被害者への弔意を示す半旗が掲げられている。

院生向け大学教授法研修が大盛況

～第二回ランチタイムFD～

さる十月四日(火)から十三日(木)にかけて、高等教育研究センターの主催により名古屋大学教員・院生の大学教授法スキル向上を目的とした「第二回ランチタイムFD」が開催されました。今回は、授業デザイン論(中井俊樹助教授)、大学教授法(夏目達也教授)、学生発達論(近田政博助教授)の三つのテーマを提供しました。十月四日(火)～六日(木)の三日間は教員用(のべ参加者十六名)、十月十一日(火)～十三日(木)は院生用(のべ参加者六十名)として開催しました。

このランチタイムFDは、ランチタイムの短い時間(十二時十分からの四十分間)を活用して授業改善のコツとノウハウを効果的に提供・共有することを目的としています。受講料は無料で三回とも出席した大学院生には修了証を授与しました。特に今回は大学院生の参加希望者が多く、研究大学において大学教師予備軍である院生が授業スキルについて、学ぶことの潜在的ニーズをもつ



受講生には戸田山センター長から修了証が渡された。

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

高学歴社会の大学

マーチン・トロウ(天野郁夫・喜多村和之訳)
東京大学出版会、1976年
(原著 1971、1973、1975の論文)

エコトピア科学研究所の山里敬也さんによると、世界で最初に携帯電話が使用されたのは1970年の大阪万博においてだそう。それから急速に進んだ携帯電話の普及は、だれもが目のあたりにしてきたことであろう。私も記憶しているが、1980年代に携帯電話を所有することは、ごく少数の者たちの特権であった。1990年代中頃に入ると、携帯電話は所有しようと思えばだれでも購入できるような身近なものとなった。さらに2000年になると、携帯電話を所有することは当

たり前と見なされ、義務感さえ生じるようになった。このようにモノの量的普及は、そのモノを持つ意味を変化させる。大学の進学についてもそれと同じではないかというのが、この本の考え方である。トロウは、大学の就学率の上昇が与える大学進学のもつ意味の変化などを歴史的・国際比較的に分析した。大学の就学率が15%までの間をエリート型、15%から50%までの間をマス型、50%以上をユニバーサル型と呼び、それ

ぞれ大学進学の意味が、「少数者の特権」、「相対的多数者の権利」、「万人の義務」と移行することを示した。さらに、大学進学の意味だけでなく、高等教育の目的、カリキュラム、教育方法、進学パターン、大学の規模、管理運営にまで変化がおき、その変化がどのようなものであるかについても指摘した。

この本は、このようなわかりやすいフレームワークで書かれており、高等教育分野では注目される本となった。日本でも1960年代前半に15%を超えた大学・短大進学率が、2005年には50%を超え、ユニバーサル化時代に入ると言われている。これからの大学像を考えると、この30年以上前に書かれた本書は十分に示唆を与えるものであると私は思う。

(中井 俊樹)

高等教育研究センタースタッフ(2005年12月現在)

センター長	戸田山 和久
	専門領域: 科学技術社会論
教授	夏目 達也
	専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論
助教授	栗本 英和
	専門領域: プロセスシステム学、情報マネジメント
助教授	近田 政博
	専門領域: 比較高等教育学、初年次教育

助教授	中井 俊樹
	専門領域: 大学教授法、高等教育マネジメント
専任講師	鳥居 朋子
	専門領域: 高等教育カリキュラム論、教育経営学
助手	青山 佳代
	専門領域: 大学評価、西洋教育史
専門職員	井上 和美
	事務室連絡先: 052-789-5696

<平成17年度 外国人客員助教授>
ケリー・クラウズ(2005年12月～2006年2月)
所属: メルボルン大学 高等教育研究センター

<平成17年度 国内客員教授>
網川 正吉 国際基督教大学 前学長・名誉教授
天野 郁夫 国立学校財務経営センター 教授
溝上 慎一 京都大学 高等教育研究開発推進センター 助教授

ホームページ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>